

農薬散布を低減できる冬春トマトのオンシツコナジラミ防除法

農業研究センター 農産園芸研究所 害虫部
担当者:古家 忠

研究のねらい

オンシツコナジラミは葉裏に寄生し吸汁加害するため、トマトの葉が繁茂すると殺虫剤散布による防除が困難となる。

また、冬春トマトでは、マルハナバチの利用やマメハモグリバエの土着天敵を保護するためにも殺虫剤散布に代わる防除法の確立が必要である。

そこで、冬春トマトのオンシツコナジラミを対象に、テープ剤を用いた防除法を検討し、殺虫剤散布を低減する。

研究の成果

- 1 オンシツコナジラミがピリプロキシフェンテープ剤（商品名：ラノーテープ）に接触すると、産卵した卵から幼虫が孵化しない。そのため、冬春トマト栽培ハウスにおいて、本テープ剤を設置すると、オンシツコナジラミの密度は栽培期間を通して低く抑えられる。
- 2 オンシツコナジラミに対する殺虫剤散布回数は、慣行防除区が4回に対して、ピリプロキシフェンテープ剤設置区では防除の必要はなく、殺虫剤散布の低減が図れる。
- 3 県内の冬春トマト産地には、マメハモグリバエの土着天敵として少なくともヒメコバチ科4種の寄生蜂が存在する。土着天敵は殺虫剤散布の影響を受けやすいが、ピリプロキシフェンテープ剤を設置すると殺虫剤散布が低減できることから、土着天敵の保護にも有効である。
- 4 以上のことから、冬春トマト栽培におけるピリプロキシフェンテープ剤の設置は、オンシツコナジラミに対する殺虫剤散布が低減でき、防除の省力化が図れる。また、マルハナバチの利用やマメハモグリバエ土着天敵の保護にも有効である。

普及上の留意点

- 1 ピリプロキシフェンテープ剤の有効成分は蚕に対して強い毒性を有するため、使用済みのテープは確実に回収し、関係の業者へ返納する。焼却や廃棄は絶対に行わない。
- 2 オンシツコナジラミの初期密度が高いと効果が低下するので、ハウス内への本種の侵入が多い時期から栽培する場合には、定植時の粒剤処理やハウス開口部のネット被覆等と組み合わせる。
- 3 シルバーリーフコナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病（病原ウイルス：TYLCV）に対するピリプロキシフェンテープ剤の感染防止効果については不明であるので、本病が発生している地域では、シルバーリーフコナジラミの防除は徹底して行う。



写真1 ピリプロキシフェンテープ剤の設置方法
(テープは常にトマトの下になるように設置する)

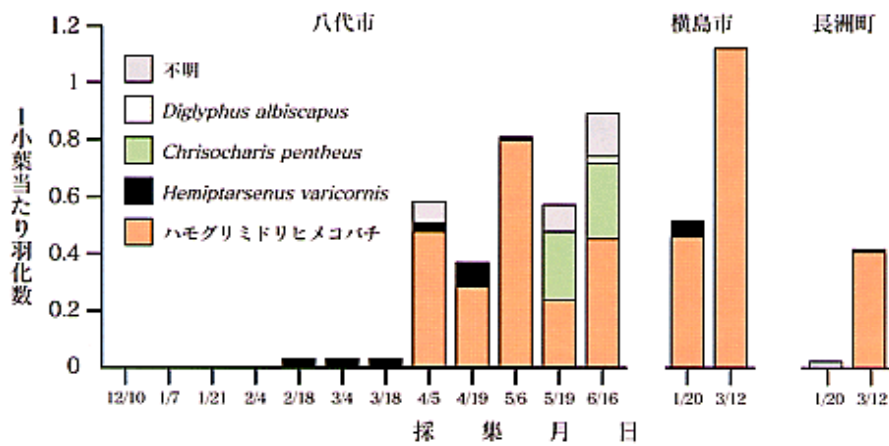


図1 オンシツコナジラミに対するピリプロキシフェンテープ剤の防除効果
図中の黒矢印はオンシツコナジラミに対する殺虫剤散布を、
また、白抜きの矢印はその他の害虫に対する殺虫剤散布を示す。

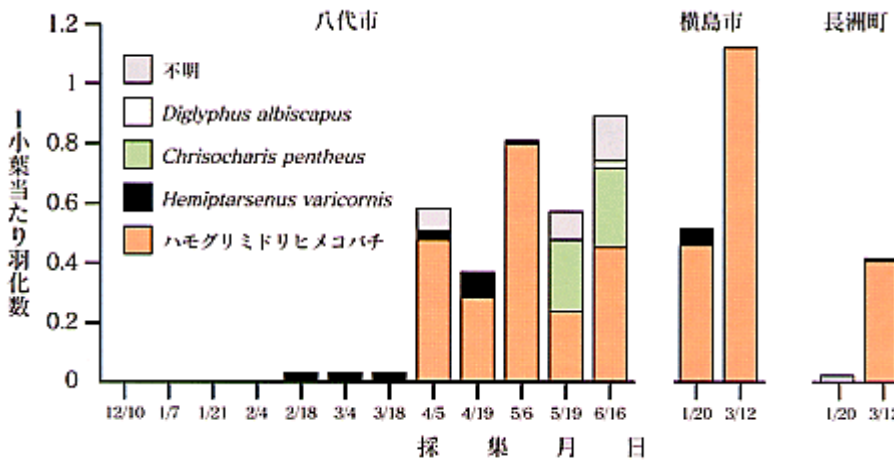


図2 マメハモグリバエ被害葉から羽化した土着寄生蜂の種類と羽化数